
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

AA 研共同課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究—トランスナショナルなネットワークと現地の応答」

2022 年度第 3 回研究会（通算第 5 回目）

日時：2022 年 2 月 13 日（日）14:00–17:00

場所：ZOOM 会合

概要：2022 年 2 月 13 日（日）に本年度の第 3 回の研究会を実施した。代表の富沢寿勇静岡県立大学教授と副代表である AA 研の床呂所員による趣旨説明に続いて、下記のように共同研究員 2 名による報告と参加者全員による質疑応答を実施した。報告の概要はそれぞれ下記の通りである。

報告タイトル：ウズベキスタンにおけるワサディーヤの萌芽過程：ムハンマド=サーディク・ムハンマド=ユースフに注目して

報告者：和崎聖日（AA 研共同研究員，中部大学）

要旨：本報告は、拙稿（2021）「ムハンマド=サーディク・ムハンマド=ユースフの軌跡：ウズベキスタン・イスラームにおける非党派主義と中道主義の萌芽過程」（『アジア・アフリカ言語文化研究』（Journal of Asian and African Studies）102, 33-62）に基づき、その一部を紹介した。具体的には、ソ連解体後の中央アジアで最も傑出したイスラーム学者と数えられるウズベキスタン東部・アンディジャン出身の上述のムハンマド=サーディク・ムハンマド=ユースフ（Muhammad Sodiq Muhammad Yusuf, 1952-2015）を取り上げた。彼の出自は、クルアーンと預言者ムハンマドのスナナの墨守を特徴とすることで一般に知られるナクシュバンディー・ムジャッディディーヤの導師に連なると言われる。ムハンマド=サーディクは、弱冠 37 歳にして中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局の第 4 代ムフティー（*mufī*: 宗務局長）（在任期間 1989-1991）、ならびにソヴィエト連邦最高会議の人民代議員に選出された経歴をもつ。また、ソ連共産党第一書記であったミハイル・ゴルバチョフ（Mikhail Gorbachev, 1931-）（在任期間 1985-1991）の個人通訳を務めたことでも知られる。加えて、1991 年にはウズベキスタン・ムスリム宗務局の初代ムフティー（在任期間 1991-1993）にも選出された。彼の思想の支持者の広がりや、カザフスタンやタジキスタンなどの中央アジア諸国、そしてロシアにまでおよぶ。彼の思想に認められる特徴は、スナナ派イスラームの知と団結力を衰退させるイスラームの政治運動と党派化の拒否、ならびに中道主義（*wasatīya*:

中庸思想)の2点にあると考えられる。本報告は、これらのうち後者に焦点を当てるものであった。そのうえで、ムハンマド=サーディクの家族文化と活動の軌跡の一部、説教の内容を主に考察することにより、第1に彼の思想を上記のように特徴づけることの妥当性を検証し、それが社会主義圏でのイスラーム学者らとの交流を契機に強化されたことを明らかにした。第2に、彼の思想を現代イスラーム世界の知的権威たちの思想潮流に位置づけることを試みた。本報告での結論の一部をここ記せば、ハナフィー革新派の学者にして穏健なイスラーム主義者であったムハンマド=サーディクの思想が現代イスラーム世界の知的権威たちの中で、カラダーウィーなど、ムスリム同胞団の穏健派と親和性のある、または穏健派の系譜に位置づけられる可能性が高いことを明らかにした。この思想潮流こそが、体制と民衆の双方の側から絶大な信頼と支持を受けている現代ウズベキスタンのイスラーム潮流の本流だと考えられた。また、中道主義が普及している国家としてムハンマド=サーディクがクウェートを絶賛していたことも注目に値すると指摘した。

報告タイトル：インドネシアにおける服装規定の変化に関する考察：ムスリム服、国民服、アダット服をめぐって

報告者：塩谷もも（AA 研共同研究員，島根県立大学）

要旨：多民族国家のインドネシアに関する研究で、衣服はアイデンティティとの関わりから注目を集めてきたテーマの一つである。インドネシアで多数派を占めるムスリムに代表される宗教、国、地域ごとのアイデンティティとの関わりから、衣服は論じられてきた。近年では、それぞれのアイデンティティを象徴する衣服間のバランスに注目が集まっている。

本発表では、服装コード（ドレスコード）に注目する。ムスリム服について「正しさ」への関心が高まる中で、それ以外の衣服との比較から、服装コードと「正しさ」を考えることが目的である。

インドネシアでは、制服の存在から同じものを着ることや、服装コードが注目を集めてきた。ムスリム服は、2000年代に入って着用者が急増したことにより多様化が進み、近年は「正しさ」とファッション性のバランスが意識されるようになった。その中で、服装コードをイラストや写真で提示するといった現象も起こっている。

ムスリム服の着用者が増える一方で、国民服であるバティック（ジャワ更紗）とクバヤ（マレー式ブラウス）の着用も拡大している。国民服は、独立後にインドネシアを象徴するものとして採用された。2009年にユネスコ世界無形文化遺産に登録されたことで、バティックは再評価され、着用も拡大した。クバヤは、日常の中での着用拡大を推進するコミュニティが2014年から活動している。

インドネシアでは、各地の慣習（アダット）に基づくアダット服が、国是である「多様性の中の統一」を示すものとして使われてきた。2017年以降は、独立記念日の国家行事で、アダット服の着用が採用された。また、特定の曜日に学校や役所でアダット服を着るという動きも出ている。これに伴って、アダット服のこれまでの服装コードは緩やかなものになり、

着やすさやファッション性が重視されるようになっている。

アダット服の「正しさ」がとくに意識される婚礼衣装については、ムスリム服と融合させた形のものも作られている。また、「インドネシア式」と呼ばれる結婚式も行なわれるようになり、これはアダット（慣習）を省略するという特徴を持ち、効率化につながっている。衣装はウェディングドレスとスーツで、結婚式も簡素化された形になっている。

前述のように、ムスリム服の着用者が増える一方で、国民服やアダット服の着用も拡大している。ムスリム服について「正しさ」が意識される中で、国民服やアダット服については、着やすさとファッション性、イスラムとのバランスを保つ服装コードが意識されている。近年の「インドネシア式」の結婚式では、効率化と同時に「アダット式」の結婚式で意識される「正しさ」が問題になりにくいという特徴を持っている。

(以上、終)